

日時：平成 29 年 11 月 18 日（土）10 時～15 時
場所：弘前医療福祉大学
記録：前田 正寿

望ましい行動を育てる PBIS (Positive Behavioral Interventions & Supports)

講師：早稲田大学大学院 高橋 あつ子 氏

*叱責は役に立っているのか？！

大人は躰のつもりで叱っているが、子どもの自己肯定感は低下していく。それと共に自分に対しても大人に対しても不信感が生まれる。エネルギーのある子は大人に反抗する、といった悪循環を生む。叱責は当初の問題行動の抑制という目的には繋がらない。

*行動の関連に気づくとできること

悪循環を断ち切るための方策として、叱責という介入をやめること。衝動性があっても問題行動にならない場面がある。そのときは普通の子ができることをやってもスルーし、注意叱責を減らし、その子の他の行動を肯定的に認める。それがプラスの循環を生み（応用行動分析学の考え）、問題行動を抑制することに繋がっていく。

ADHD のように衝動性がなくなるこの場合は、とくに叱責の生徒指導から PBIS に乗り換えていく必要がある。また、衝動性が起こらないように先行条件を変えることも大事。例えば、レストランが混んでいて食事ができない（A 先行条件）→ レストランで騒いでしまう（B 問題行動）→ 母はイライラする（C 結果）を混んでいるレストランには入らない、あるいは玩具を出す（A 先行条件）→ 騒がないで待てる（B 問題行動）→ 母はイライラしない（C 結果）というように。クラスワイドやスクールワイドで実践していくと効果的。

行動を扱うアプローチの教育的応用（初級編）

*機能的行動分析（FBA）の長所

行動を変え、教えるために環境を調整する。それによってその子がもっている解決する力を引き出すことができる。ペアトレ同様、行動を問題にする。経験値だけではなく、データに基づいて検討する。それによって、経験則による対応の非に気づくことができる。例えば、その子には注意や警告が強化刺激になっているということなど。

FAB の手順としては、まず、子どもの気になる行動の中で、ターゲット行動を特定する。次にその行動の生起についてのデータをとる。生起パターンや動機を査定し対応策を練る。行動を定義する際は、暴言、暴力、器物破損など具体的な行動を。態度や抽象的な表現は避ける。例えば、授業に参加しないなど。カウントできる行動をターゲットとする。

*機能的行動アセスメントインタビュー

データをとるときは、問題行動はどのようなものか、頻度は？、持続時間は？、生活への支障や危険度は？、先行事象は？さらに、起きやすい時間帯、起きにくい時間帯、引き起こしていると考えられるのも、悪化させる状況といったことに着目する。

*行動の動機を査定する（MOTIVATION ASSESSMENT SCALE）

なぜ、その行動が起きているのかをチェックし、感覚要因、逃避要因、注目要因、物的要因に分類して、計算するし、何を求めている行動かを知る。

*適応的な行動や欲求不満耐性を育てる

〈感覚要因〉一人、誰もいない、楽しい ⇒ 感覚探求からの行動 ⇒ もっといい行動に。人に迷惑をかけない。ペン回し、ハンドスピナーなど。

〈逃避要因〉難しい、要求された時、困らせる、要求がないと止まる ⇒ できる課題で充足、援助要請行動を。手伝って。読めないと言えばよいということを教える。

〈注目要因〉教師が他の子と。その子から注意がそれると、困らせようと。教師を独占したい。⇒ 適応的な行動に注目を注ぎ、いい独占も。

〈物的要因〉欲しい時、取り上げられ、できないと告げられた時。手に入ると止まる ⇒ 予告する。努力すれば手に入る状況を可視化。より適応的なものに動機づけられるようにする。

*強化子の種類と操作

好ましい行動を増やしたい時は、正の強化を与えるか or 負の強化を取り除くか。行動を減らしたい時は、正の罰を与えるか or 負の罰を取り除くか。教員も練習しないとなかなかできない人もいる。練習が必要。

PBIS (Positive Behavioral interventions & supports)

積極的生徒指導として、問題が起きてからの対応ではなく、開発的予防に取り組む（よい方向に進むとする考え方）生徒指導。これは根っこからよい方向をつくるということ。これにはスクールワイド（学校全体）で取り組まなければいけないことで、アメリカでは国家的な推進を図っている。全米14300校以上がこれに取り組んでいる。

PBIS がよいものだということを説明するには結果をださないといけない。そのためにはリサーチをし、それをベースとするものを導入しなければいけない。リサーチベースは科学的に検証すること、誰もがよい学級をつくることそのためには評価が必要。クレームがきたらきちんと説明できるものを増やしておく。だから PBIS をやっても大丈夫という説得できるエビデンスが必要となる。

UDL をやっているところは PBIS もやっている

- ・一次支援（80～85%）【学校ワイドで取り組む】
すべての子どもに対して行う指導・援助は問題行動を示す時児童・生徒又は問題行動を示さない生徒は UDL を介入して取り組んでいる
 - ・二次支援（3～7%）【ここからは個別支援となる】
慢性的もしくは深刻な問題行動を示す児童生徒
 - ・三次支援（1～2%）
危険な問題行動を示す児童生徒
- 一次支援を一番大切にしなければいけない

エビデンスに基づいた介入として

○学校全体では	○学級・授業で
1 核となるリーダーのチーム 2 目標として定義 3 期待望ましい行動 4 学校学級全体でどう教えるか 5 望ましい行動を促すための支援 6 ルールを破り抑制する切れ目のない支援を設計する 7 データ測定→評価	1 活動や環境に構造をもたせ何をすれば何が起こるのか予測可能性を高める 2 望ましい行動を掲示し、教え再確認する 3 効果があることがわかっている教材や指導法を用いる 4 望ましい行動の自発を切れ目なく承認する 5 望ましくない行動の切れ目ない対応
学校授業以外で 1 期待することや活動を教えて促す 2 すべてのスタッフが積極的に指導（見回り近づいて関わる） 3 問題行動が起こる前に修正し促す 4 正の強化を使う	

Positive Behavioral への5つのステップ

- ①行動の定義を明確化（行動を中心としてみる）ポジティブに
- ②教える（学校全体・すべての児童生徒）
啓発として「正しい行動」を教える時にそれがみられるようにする
（例） 掲示物に「汚すな」というのではなく「きれいに使ってありがとう」というように
価値と行動が決まればそれを教える。
- ③見習う（モデリング）・練習する
- ④ごほうび・お祝い
- ▼ ⑤再度教える（第2層・第3層の児童生徒）

グリーンとイエロー

グリーンはよい状態。イエローは危険信号の状態。レッドはすぐ中止する状態。

特に今の状態はと聞かれたら答えられるように意識することも大切。

例えば 「～してはいけません。」という言い方はダメで「～できるようにしよう」を基本とする。このような言い方に置き換えられるようにする。これらは応用行動分析がベースとなる。精神だけではなく行動をも育てないといけないからである。

ポジティブがいかによい行動をとれるかを知るべきだ。プラスの循環は子どもの自己評価を上げていく。子どもが自己評価しやすくなる。つまり先生が評価するためにやるのではなく子ども自身が自分を育てるためにすることに繋がる。そのためにはまず脳にポジティブの刺激を植え付けゴールの設定を行うようにしなければならない。

PBIS でグリーンチームをつくる

- ・教科別に
- ・学年別に
- ・日ごとのデータ
- ・保護者向けの通信やレター
- ・家庭向けのマトリックス
- ・各自のリサーチ
- ・メジャーの記録
- ・マイナーの記録 等

日本の PBIS の一次支援の実践

・よい行動 ・行動マトリックス ・HAND in HAND ・ピアサポート ・SEL
・品格教育の基盤となること ・目指す行動目標 等でありモニタリングの機会を増やす。正の強化を使うことが一番効果的である。

荒れている学校が落ち着いて行く方法の一つにあいさつ名人をつくったり、行動マトリックス、UDL をつくることによってアセスが上昇してくる。自己評価が学校全体で見渡せることで多くのことが学校に波及される。

最初の目標がよい場面や行動になり、2・3次支援とよの連動が起こる。例えばゲノムマトリトレニングがある。これはあいさつすることはリスペクトされることにはつながらない。リスペクトを達成するためにはあいさつがある。カードに名前を書いて渡してあげられる Behavioral のカードは個人レベルであるが問題行動が頻発している学校ではモグラたたきの状態から脱却できるものである。

ポジティブに「どのような3年生になりたい」「2年生から立派だと思われるには」と考えさせる。

何が子どもを変えたのかそのためには

目標をつくる自分たちの親で合意形成をする。自己目標を具体化する。（すると行動が変わる）
日常の行動をモデリングする。

ここまでの変化を自己評価し、修正するための方略を考える。